傘鉾と芸能１
―傘と踊り―

段　上　達　雄

【要　　旨】

傘に伴う芸能である住吉踊りを中心に、その歴史的展開と歌舞伎などへの影響や、住吉踊りの系譜を引く願人踊り、かっぽれの様相について考察し、盆踊りの傘についても触れる。

【キーワード】

傘、ぼろぼろ、ささら説教、住吉踊り、かっぽれ

はじめに

「住吉踊り」は住吉大社の神宮寺の勧進僧たちが行った宗教芸能であったと伝え、近世後期になると、この仏教的芸能は住吉大社とは関係のない上方や江戸の願人坊主たちの収入源ともなっていった。そのため、門付け芸として多くの人目に触れ、大傘を伴った独特な芸態であったために、浮世絵などに頻繁に描かれるようになる。この住吉踊りの間接的な先駆形態として、鎌倉後期の「ぼろぼろ」や室町期に登場する「ささら説教」などの下級宗教者たちの語る「説教」が位置づけられると考えられ、いずれも傘を用いていた。住吉踊りの影響は地方にも及び、願人踊りや願念坊踊りなどの民俗芸能として伝承されるようになる。そして, 住吉踊りは近世末には「かっぽれ」へと発展してゆく。また、仏教色の濃い盆踊りにも、傘を伴う地域が西日本に散在する。この論文では、仏教の系統を引く傘を伴う芸能について述べていきたいと考えている。

（１）絵巻・屏風に描かれた傘

一遍上人絵伝

国宝『一遍上人絵伝』は人々の暮らしが活写された優れた絵巻である。この絵巻の各所に、巻物を柄に結びつけた傘を持つ下級宗教者とおぼしき男たちの姿が描かれている。

ぼろぼろ

黒田日出男氏は、『一遍上人絵伝』に描かれた傘を持った宗教者たちを次のように解読している。

> 多くの『ぼろぼろ』集団に、さした傘の柄の上部に巻物のようなものを括りつけている人物が混じっており、この巻物が何を意味するのかということである。（ただし、このように傘の柄に巻物を括りつけているのが、『ぼろぼろ』たちだけではないことに注意しておきたい。）この巻物については、当初は経巻のようなものの可能性もあると考えていた。しかし（中略）、どの画像でも、傘の柄の上部に括りつけられているところがヒントになると思われる。つまり図10に想定したように、さした傘はそのまま天蓋

P01 一遍聖絵第１巻
「善光寺」

P01 一遍聖絵第３巻
「三輩九品の道場」

P01 一遍聖絵第６巻
「浜の地蔵堂」

P01 一遍聖絵第12巻
「一遍臨終の観音堂」

となり、そこに括りつけられたまま巻物を垂らすと本尊像などのようになるというわけだ。こうすれば、どこでもたちどころに道場となる。つまりその巻物は経巻ではなくて、絵である。おそらく『ぼろぼろ』の信仰と宗教活動に不可欠な、本尊像ないしはそれに類する図像が描かれていたものではないだろうか[1]」

黒田日出男氏の分析は、ぼろぼろたちが傘の下に開いた掛け軸を用いて布教する姿を描いた図像が見当たらないという点を抜きにしても、秀逸な仮説であろうと考えられる。

『一遍聖絵』には次のような場面に巻物を吊した傘を持った人物が描かれている。

第一巻　「善光寺」の場面
第三巻　「三輩九品の道場」の場面
第六巻　「浜の地蔵堂」「尾張甚目寺」の場面
第七巻　「市屋の道場近くの堀川のほとり」の場面
第十二巻　「一遍臨終の観音堂」の場面

鎌倉末期の『徒然草』第百十五段には「ぼろぼろ」について次のように記している。そこには「宿河原といふ所にて、ぼろぼろ多く集まりて九品の念仏を申しけるに」「ぼろぼろといふもの、昔はなかりけるにや。近き世に、ぼろんじ・梵字・漢字など云ひける者、その始めなりけるとかや。世を捨てたるに似て我執深く、仏道を願ふに似て闘諍を事とす」と記されている。宿河原という所でしら梵字というぼろが師の仇であるいろをし坊と果し合いをして、共に討ち果てたという物語である。この「ぼろぼろ」は「暮露」「梵論」とも表記された、有髪の乞食僧である。明応年間（1492～1501）に作成された『七十一番職人歌合』に描かれた暮露は、鉢巻を締めて袴を穿き、顎髭を伸ばした男が小刀を腰に差して正座した姿で、傍らに長柄の傘と下駄を描いている。その傘の中ほどがふくれているのは、尊像を描いた巻物が入っているためというのは考え過ぎだろうか。

中世末になると、「ささら説教」という芸能者が登場する。『東山遊楽図屏風』（高津古文化会館蔵）は1620年代に描かれた六曲一双の屏風である。右隻の第６曲目下方に松樹の前に黒い装束の男が一人立っている。黒い傘を立てた下にいる男は摺り籔を鳴らし、その周囲を12人ほどの聴衆が取り囲んでいる。これが「ささら説教」と呼ばれる芸能であるという[2]。説教とはいうが、その主な演目は「小栗判官」や「山椒大夫」などの“哀れで殊勝な物語”であった。彼らは大傘を立て、摺り籔を鳴らすのが外見上の特徴であり、中世

P05七十一番職人歌合
「暮露」ささら説教

末から近世初頭に活動していたという。

『一遍上人聖絵』は鎌倉時代後期の作品であるが、そこに描かれた「ぼろぼろ」たちは、傘下に尊像の軸を下げて説法しただろうと、黒田日出男は考察しているが、この「ささら説教」はその系譜を引くのかも知れない。また、室町中期に登場した放下僧の影響も考えられる。放下僧とは、簫を鳴らしながら民衆に仏教の教義をわかりやすく説いた禅宗系の僧侶のことである。これらの中世の宗教者たち、あるいは芸能者たちは立てた傘の下で庶民への布教を行ったり、芸能を演じていた。

ぼろぼろたちは掛軸に描かれた尊像にさしかける天蓋として傘を用いたと考えられる。しかし、それだけが理由ではなかったであろう。今でもそうだが、高位の僧侶にさしかけられた傘は、その僧侶の宗教的権威を表徴するという機能をもっている。そのため、宗教的権威の象徴として傘を利用しようとした、とも考えられる。

（２）住吉踊り

住吉踊りと呼ばれる、傘を中心にして踊る芸能がある。住吉大社では、毎年６月14日に神田の中に仮設される舞台上の屋形内に傘鉾が立てられ、それを中心に「御田植神事」が行われ、その最後に神田の周囲と舞台上で住吉踊りが行われる。現在、住吉踊保存後援会が伝承の中心となり、正月三が日は住吉大社の特設舞台での奉納が行われ、７月30日から８月１日の住吉祭では大阪市住吉区、同住之江区、堺市内など各地区で踊る。それに仲秋の日に行われる観月祭でも奉納している。

現在の住吉踊りでは、踊りの中心となる教導師は大人で、赤い幕を巡らせた大傘の長柄を左手に持ち、傘の柄を右手に持った棒で打ちながら拍子を取り、住吉踊りの唄を歌う。そして、その周囲を童女たちが踊る。また、同時に御田植神事の神田の周囲を取り囲むように大勢の童女たちが住吉踊りを踊るのである。御田植祭神事の後に演じられる住吉踊では、200人ほどの女の子たちが踊り、３本の大傘が登場する。御田中央の舞台に捧持された１基の大傘の周囲を８人の踊り手が踊る。御田の周囲では大勢の踊り手たちが時計廻り方向に進みながら踊る。本来、踊り手は四人一組が基本で、音頭取り（大傘を捧持する者で、傘の柄を叩いて拍子をとる）を中心に、踊り手四人と合わせて心の字になるように踊ったのだという。

住吉踊の踊り手は、教導師も踊り手の童女たちも白い着物に黒い腰衣をつけ、赤い垂れを巡らせた菅笠を被り、手甲脚絆に草鞋履きである。この衣裳は墨染めの僧服に由来する。右手には団扇を持ち、腰の後にもう一本団扇を挿して踊る。団扇を持って踊るのは稲虫を払う意味があるという。団扇の表には、神紋の「三つ巴」と「木瓜」を描いて「住吉大社」と記し、裏に「住吉踊」と大書きする。団扇の左右両端に緑・薄黄・赤・白・紫の５本のリボンと小鈴をつける。

次に住吉踊歌を紹介する。

「住吉さまのイヤホエの　あらおもしろの神踊り　天長く地久しく　天下泰平　国土安全　五穀成就　民栄え　治まる御代のためしとて　かねてぞ植えし　住吉の　岸の姫松　目出度さよエー住吉さまのイヤホエ」

住吉踊の大傘は朱色の爪折傘で、捧持型の傘鉾である。傘上には御幣を立て、幅40cmほどの赤布を周囲に巡らすが、前方を開けて後方と左右の三分の二ほどに垂れている。大傘の直径は約1.8ｍ、柄長約２ｍ、全高約2.6ｍである。大傘は仏法の天蓋を象り、天が下に住む我らは心を本とするという意味であるという。傘上に白い御幣を立てるところを見ると、神仏の依り代としての意味もあるのかも知れない。

P06 御田の舞台上での
住吉踊り

P07 神田周囲の住吉踊り

P08 住吉踊りの傘鉾

『住吉区誌』の「住吉踊り」の項[3]に「神功皇后征韓 凱旋のみぎり、堺七堂が浜に御上陸の時、土豪阿部氏の祖が氏楽を奏したのが始めといわれる」と記されているが、これは由来を古く遡るための物語で、伝説の域を出るとは思われない。しかし「神社（住吉大社）の北手に、旧号を新羅寺といつた住吉神宮寺があり、住吉舞をつくり、その僧徒たちによつて天下泰平・護国成就・庶民繁栄を祈られ、住吉参詣者の供物を集められた」とも記されており、この芸能に仏教寺院が関与していたことを伝えている。神宮寺の勧進僧たちが、五穀豊穣や家内安全などの唄を歌いながら「住吉舞」という芸能を演じて、住吉大社への寄付を集めていた。それが次第に京大阪の願人坊主たちが物乞いのために真似るようになり、次第に門付け芸として広まっていったというのである。

また、「この住吉舞の踊手の服装は僧服から出ており、色の五彩は天地五行に象どり、傘は仏法の天蓋、天が下に住む我等は心を本とするを意味し、踊の手振りも四人を合せて心の字様に踊り、中心の音頭取一人を加えて心という字形になる。掛声のイヤホイは陰陽穂栄をくずしたもの、団扇を手にするのは稲虫をはらう意だといわれる」と、住吉踊りにまつわる意味論を紹介している。

勧進僧たちは住吉大社の御田植神事の時には住吉神宮寺に戻って住吉踊りを演じ、旧暦６月30日の南祭まで滞在して再び廻国の旅に出ていたという。

明治４年（1871）、廃仏毀釈で住吉神宮寺が廃されたことを契機に、住吉踊りは次第に衰微して、明治20年（1887）以降、大阪分市内で住吉踊りが見られなくなった。しかし、地元の伊勢神宮参拝団である楽正会が、宴会芸として住吉踊りを伝えており、大正11年（1922）３月に貞明皇后が住吉大社に参拝された時に住吉踊を復活させ、同年５月の御田植神事で復興を果たした[4]。

現在は幼稚園児や小学校６年生までの女子児童などによって踊られている。子どもたちに踊らせるようになったのは、昭和３年（1928）からだという[5]。この住吉踊の踊り手は住吉踊保存後援会が募集している。

なお、現行の住吉踊唄は前述したが、昔は唄にいくつか種類あった。

「エー住吉様の　摂津浪速の一の宮　エー住吉様の　今日の御田植ことほぎて　エー住吉様の天下泰平　国土安全　エー住吉様の　五穀豊穣民栄え　エー住吉様の　かねてぞ植えし住吉のエー住吉様の　岸の姫松めでたさよ　エー住吉様の　あら面白や神おどり　エー住吉様の…[6]」

「住吉様のイヤホイ。一の本社は底筒男の尊様、二のお宮様は中筒男の尊様、三のお宮様は表筒男の尊様、四のお宮は、これがいわゆる神功皇后様、夫を合せて、住吉四社明神と称え奉る。これこがねの天のえちほつこんご、おせんど、おせんど」

「住吉様のイヤホイ。四社の御前の神かぐら、いつも変らぬ鈴の音、ヤレ住吉さまの、岸の姫松めでたさよ。エーエ住の江の神の心をまもるなら、家内安全商売繁盛、家の内御祈祷、チリリ

ヤタラリ、かささぎの橋、そうれ橋やかくの鳥居や玉出の岸や、ソレ住吉様の、岸の姫松めでたさよ」

大正８年（1919）に広重会が刊行した『浪花名所図会』の「住吉御田の祭式田楽の図」の下方に住吉踊りの一行を描いているが、赤い幕を巡らせて御幣を立てた傘鉾１基、それに４人の踊り手の赤い笠を描いている。この絵は江戸後期の住吉神社の住吉踊りを描いているもので、当時、住吉踊りの勧進僧は赤い幕を巡らせた笠を被って踊っていたことが分かる。現在の踊り手たちの笠は、これをもとに再現したものであろう。

住吉踊りに至る系譜

住吉踊りがどのような芸能の影響を受けて成立したのかは明らかではない。鎌倉後期のぼろぼろや室町後期のささら説教の流れをくみ、宗教的な芸能として成立したものではないかと思われるが、ぼろぼろもささら説教も「踊り」ではなく、「語り」である。

神仏習合の時代であったため、神宮寺の僧侶が住吉神を祀ることは当然であったし、住吉神への信仰を元に勧進できたとも言えよう。住吉神への勧進であったため、傘鉾には御幣が立てられ、依り代であることを明示していた。その流れは願人坊主たちが行うようになって芸能化が進んだ後も、あるいはその系譜をひくかっぽれになっても変わりなく御幣を立てた傘鉾が用いられ続けた。

まず第一の問題は、なぜ傘鉾、あるいは傘を中心に踊るのかであろう。日本で最初に神（ただし疫神ではあるが）の憑依する傘となったのが「やすらい花」の傘であるが、疫神を芸能によって集めるという点では、傘に伴う芸能の始まりでもあった。その流れは京都祇園会の傘鉾にも伝えられ、室町後期には鷺舞などの芸能が伴うようになっていた。このような傘鉾に伴う先行芸能の影響を受けて、住吉踊りが成立したのではないかと考えられるが、成立当初の状況の記録がないため、推測の域を出ない。

（３）住吉踊りの広がり

住吉舞という芸能によって僧侶たちが人々を集めて勧進するという方法は、大道芸人でもあった願人坊主などに真似されて、大阪や江戸で門付芸に変化していった。

願人坊主とは大道芸人の一種で、初めは寺社仏閣への参拝や祈願、修行や水垢離などの代行から始まったが、次第に住吉踊りや阿呆陀羅経、軽口に謎かけなど、さまざまな門付け芸を行うようになっていった。

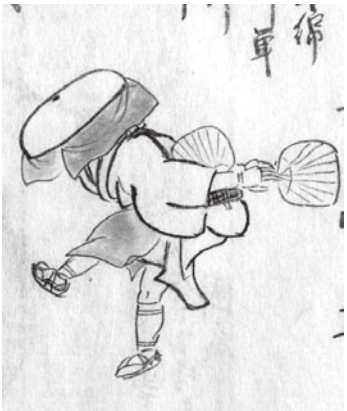
「七枚続花の姿絵」は文化８年（1811）に江戸市村座で初演された歌舞伎所作事である。三世坂東三津三郎の七変化舞踊で、「潮汲」「猿回し」などと共に常磐津の「願人坊主」があり、願人坊主の芸態をうかがうことができる。

住吉踊りはさまざまな芸能者にとりこまれていった。そのような住吉踊りを題材にした近世後期の浮世絵が数多く残されている。

僧侶姿による住吉踊りの絵は、その古い姿を伝えているのかも知れない。

僧侶姿の住吉踊りの踊り手を描いたものに、歌川国貞（1786～1865）の三枚続きの錦絵『重年花源氏顔鏡（かわらぬはなげんじのかおみせ）』がある。図中に「五渡亭国貞」と書かれていることから、国貞が五渡亭を名乗っていた文化８年（1811）から天保15年（1844）までの作であることがわかる。『重年花源氏顔鏡』は江戸市村座で文政10年（1827）に演じられた顔見世狂言で、「栄華の夢全盛遊」の段で住吉踊りが演じられており、この錦絵はこの時の芝居絵であろう。三枚続きの右端が住吉踊りで、三代目坂東三津五郎（1775～1832）が演じる「住吉踊りやつとこ清八」と子役の三代目板東三八

P09「重年花源氏顔鏡」の
住吉踊り（1827）



P10『守貞漫稿』の住吉踊

P11『絵本御伽品鏡』の
住吉踊（1739）

P12『人倫訓蒙図彙』のすみよし
おとり（1690）

P13『一蝶画譜』の住吉おとり（1770）

の「同よんや名尾吉」が描かれている。なお、中央の錦絵は二代目岩井粂三郎（1799～1836の「仲居おやま」、左端の錦絵は七代目市川団十郎（1791～1859）の「上総七兵（衛）景清」である。

右端の錦絵の画面上部には満開の桜の枝を描く。三津五郎と三八はいずれも薄墨色の着物に黒い腰衣を巻き、下に浅黄色の襟のついた赤色の襦袢を着る。大の字と梶の葉紋を藍染めした手拭いを頭に巻き、浅黄色の手甲と脚絆をつけ、草鞋履きである。三津五郎は左手で傘鉾を支え、右手に持った棒で柄を叩いて調子をとっており、三八は右手に赤い団扇を持って踊っている。傘鉾は朱傘で、傘の周縁部に梶の葉紋（坂東三津五郎家の替紋）を白く染め抜いた赤い幕を巡らせる。傘の柄は青竹である。赤や浅黄色の襦袢等、単なる墨染めの僧衣とは言いにくい華やかな配色である。そのままではないだろうが、この錦絵は住吉神宮寺の勧進僧の姿を比較的良く伝えているのかも知れない。

同様に僧服を着用した住吉踊りの絵に、『守貞漫稿』と『一蝶画譜』がある。

喜多川守貞（1810～？）の『守貞漫稿』には住吉踊りの僧形の踊り手が二人描かれている。そして英一蝶の『一蝶画譜』に描かれた住吉踊りの踊り手一人も僧形である。『守貞漫稿』の詞書

は次のようなものである。

江戸住吉踊り是も凡文政前其扮（いでたち）大概京阪と大同小異。是願人の所行也。又近年は乞胸配下より出るが故に、其扮大異にして且亦有髪の徒のみ。昔の住吉踊一蝶画譜所載。昔は前垂小紋染等を用ふ歟。蓋墨画の印本故茜染を画くこと能はず。白のま丶にては衣服と混ずる故に紋を画く歟。前垂三幅歟。背にて合せり。今は二幅故に背に合ず。団扇画もおのおのへ異なり、傘を持たる一人は団扇なし。五人同扮也。蓋、前垂の模様は各異也。五人の内一人長柄傘の上に幣帛と大麻を付け、又傘の周りに菊唐草等の有紋の帛か木綿歟を一幅横に巡らせたり。此一の巡りを四人踊り巡る図なり。前文の如くに出れども、恐らくは前垂小紋は事実なるべし。今世、京阪の住吉踊りも一人長柄傘の頂きに幣帛を立て周りには茜染無地木綿横に一幅を巡らし、此傘柄を長さ五寸幅一寸余の割竹を以て拍レ之て唄ふ。三四人巡レ之踊ること昔し相て（欠字アル歟）踊風も聊か異なる歟。五人共図のごとき菅笠の周りにも茜木綿を巡し、正面四五寸を除けたり。白木綿単衣服、帯浅木地、小紋等の木綿前結び、蓋衣服図の如く、帯下にて前後ひとしくかゝげ、茜木綿二幅前垂に白木綿手甲脚絆甲掛也。白無画の深草団扇一つを手に持ち、又一つを背に挟む傘の一人も背に挟レ之。

喜多川守貞の原文を意訳しながら、その内容を検討したい。

「江戸住吉踊り　おおよそ文政年間以前のいでたちは、だいたい京阪とほぼ同じ。これは願人がやっている。また近年、乞胸の配下から出ているため、そのいでたちは大きく異なり、また有髪の者である」

文政年間（1818～30）以前では、京阪と江戸の住吉踊りのいでたちは変わらなかったというのである。京阪とはいえ、喜多川守貞は京都に住んでいないので、これは大坂と江戸との比較であろう。願人とは願人坊主のことで、近世の大道芸人で、本来は神仏への参詣や祈願を代行することからついた名である。最近は乞胸の配下から出ているため、禿頭の僧侶ではなく有髪の者となっているというのである。乞胸とは江戸で大道芸をしていた芸人たちのことで、町人身分ではあったが、穢多頭の弾左衛門の配下であった。

「昔の住吉踊りは『一蝶画譜』に描かれている」

『一蝶画譜』は鈴鄰松（1732～1803）が、英一蝶（1652～1724）の原画を模写したものを明和７年（1770）に出版したものだという。

「昔は前垂（前掛け）に小紋染めの布を用いていただろう。たぶん墨画の木版本であるため、茜染めを表すことが出来なかったに違いない。白のままでは衣服と間違えるので、紋を描いたと思われる。前垂は三幅（布を三枚横につないで幅広にした前掛け）であろう。背で合わせている。今の住吉踊りの踊り手は二幅の前掛けをつけているので、背まで届かない。団扇の絵もそれぞれ異なっている。傘を持つ一人は団扇を持たず、五人共いでたちは同じである。前掛けの模様はそれぞれ異なっていることは間違いないだろう。長柄傘の上には幣帛と大麻をつけ、また傘の周りには菊唐草の紋の入った絹布か木綿布かを一幅横に巡らせている。この一人の周りを四人が踊り巡る図である。先に述べたように、前掛けの小紋は事実であろう」

喜多川守貞は前垂れがとても気になっていたのだろう。英一蝶が活躍した江戸中期でも住吉踊りの踊り手の衣裳の一部に茜色が用いられていたことを言いたかったに違いない。

本来、住吉踊りの踊り手の衣裳は、墨染めの僧服だっただろうが、願人たちによって門付け芸になってゆくことにより、次第に茜色や浅黄色などの華やかな色彩を加えるようになったと考えられる。また、傘鉾も人目を引き付けるために重層化したようである。

歌川広重（1797～1858）が描いた住吉踊りの絵を用いて、その変化をたどってみたい。

P14保永堂版「東海道五十三次」
日本橋

P15「江戸高名会亭尽」
浅草雷門前かめや

P16「名所江戸百景」
日本橋通一丁目略図

例えば、保永堂版『東海道五十三次』は天保４年（1833）から翌年の天保５年にかけて刊行され、その「日本橋」（P14）に、橋のたもとにたたずむ住吉踊りの一行が描かれている。独りの男が肩に担いだ傘鉾は傘が一段で、頂きに御幣を立てる。傘の幕は赤色で花模様をつけ、浅黄色の手拭いを被り、股引姿で草鞋を履く。

『江戸高名会亭尽』は天保６年（1834）から13年（1842）にかけて刊行された広重の浮世絵で、その「浅草雷門前かめや」（P15）には、雷門前の料亭かめやの横道から出てきた住吉踊りの一行を描いている。傘鉾の傘は三段になり、傘紙は紺色で、三段の傘の幕は赤、最上部には御幣を立てる。踊り手は白い着物に黒い股引、赤い前掛けをつけ、浅葱の手拭いで頭を覆う。

『名所江戸百景』は安政３年（1856）から５年（1858）にかけて刊行された広重の連作である。その「日本橋通一丁目略図」（P16）には、傘を担いで歩いてゆく住吉踊りの一行を画面中央に大きく描写し、その後ろには菅笠を被って紺地の派手な模様の着物を着た女が三味線を持って付き従っている。芸能化が進んでいることが良く分かる。傘鉾は二段で、傘紙は浅黄色、上段の傘上に御幣を立てる。傘の幕も二段で、２輪の花模様を連模様と思われる白抜きが散りばめられている。４人の踊り手たちは白衣を着て赤い前掛け続して白抜きに赤く染めている。踊り手は５人で、白衣の上に浅黄色に藍色の格子文の着物を着用し、赤い前掛けに白い股引をつけ、草鞋履きである。

（４）かっぽれ

かっぽれは中央に立てられた長柄の二蓋笠（２段の傘鉾）を数人の踊り手が取り巻いて俗謡や俗曲にあわせて踊り、踊りの合間に掛け合い噺をする芸能である。踊り手は白い衣に丸ぐけの帯、墨染めの腰衣を巻いていた。かっぽれは住吉踊りを元に願人坊主たちが始めた芸能だと考えられる。願人坊主たちは住吉踊りを取り入れただけではなく、その踊り唄を当時の流行歌である俗謡や俗曲に変えて、新趣向の芸能を創出したのである。明治38年（1906）に刊行された『江戸府内絵本風俗往来』下編に「住吉踊」の図（P17）と解説が掲載されている[7]。

〇住吉踊

住吉踊り、一にかッぽれとも唱へたり。九尺斗の竿の先へ御幣萬燈を取付、其下に大小の傘を二段に開き、傘の周囲に美麗く染模様ある幕を垂、同勢六七人白き衣類に晒しの下帯、手巾は年中垢付を嫌ひて清く、向鉢巻後鉢巻は坊主天窓に締よく、一種特別上手といはんか妙といふの外なかるべし。四竹打囃し、三味線を相方に、歌の調面白く、沖の暗のに白帆が見ゆる。あれは紀伊国蜜柑船の江戸へ入る頃は住吉坊主の顔色渋茶で、かッぽれと変じけるは、市中寒に向ひ、此等の見物するものなきまゝ、家業の苦心に一切喰役ぶつと（以下略）

図には「住吉踊　かっぽれへ」と書かれ、大きな御幣を載せた２段の傘の周囲には文様入りの幕をそれぞれ巡らせている。住吉踊りとかっぽれが結びつく有力な証拠である。上下の傘の間には「神宮」「太平」と書かれた万灯（行灯）を組み込んでいる。この「住吉踊かっぽれ」の一行は総勢８人で、２人が前方で踊り、傘を持つ男は右手に持った棒で傘の柄をたたいて調子をとっている。傘の周りの５人の男は歌っており、１人の女が三味線を弾きながら歌っている。解説と図では、万灯の位置や四竹の存在などの相違が見られる。また江戸期には住吉踊りとかっぽれは完全に分化していなかったと考えられる。

明治時代になると、かっぽれの名人が登場する。豊年斎梅坊主（1854～1927）である。彼は少年時代に阿呆陀羅経を習い、門付けをして生計を立てるようになる。豊年斎は明治維新前後、かっぽれの名人として人気を博すようになり、明治期になると、黒田清隆や西園寺公望の屋敷に呼ばれるほどだった。かっぽれは絶大な人気を誇るようになり、歌舞伎にも影響を与えた。「初霞空住吉（はつがすみそらもすみよし）」が明治15年（1982）に初上演されたが、豊年斎梅坊主からカッポレの指導受けた九代目市川團十郎（1838～1903）が、舞台でかっぽれを踊ったのである。人気を博したかっぽれは、次第に大道芸から座敷芸へと変化するものもあり、芸妓や幇間なども踊るようになった。現在、「江戸かっぽれ」といって、家元制度を確立して伝統的な芸能として全国的に普及するようになった。

P17 かっぽれ「江戸府内絵本風俗往来」

（５）地方への広がり

願人たちが演じた住吉踊りは、大阪や京都、江戸だけではなく、全国各地に波及したようである。現在でも傘鉾の廻りで演技をする願人系の芸能が地方に残存している。

①諏訪神社の「願人踊り」

秋田県南秋田郡八郎潟町一日市の大通りの諏訪神社では、毎年５月５日の例祭日に「願人踊り」が奉納される。音頭取りと歌い手は女物の襦袢を着て手拭いを被り、黄色の色襷を十字掛けにする。風流傘を立てて、傘の柄を鄙で叩きながら、「イヤンヤー」「コンノエー」「アンマサエー」「伊勢じゃナエ」の４曲を歌う。歌に合わせて踊る踊り手は、手拭いを被り、襦袢の下に前垂れ（相撲取りの化粧まわしに類似）を垂らし、襦袢の裾を束（あずま）からげにする。そして願人踊りの合間に歌

舞伎狂言「仮名手本忠臣蔵五段」の荒事を演じる。願人踊りは住吉踊系の踊りに伊勢音頭、それに歌舞伎が加わった華やかな芸能だといえる。

風流傘は紺地の傘紙を張った唐傘の柄に竹竿を継ぎ足したもので、傘上に御幣を立て、傘の周囲に赤地花柄の幕を垂らす。風流傘の総高約2.3ｍ、傘直径約0.9ｍある。

この地方では願人とは山伏（修験者）のことであった。願人たちは伊勢や熊野信仰を広めるため、村廻りの芸人として各地を巡り歩いていた。250年以上前、彼らがこの地に願人踊りを伝えたという。そして、江戸時代中期、羽立の豪農で俳人だった村井素太夫が、上方へ旅をした時に伊勢音頭を覚えて帰り、一日市に伝承されていた願人踊りに伊勢音頭を取り入れたと伝えている。

②嘉瀬の奴踊り

青森県五所川原市金木町嘉瀬の「嘉瀬の奴踊り」は、口説きに合わせて踊るテンポの速い盆踊で、毎年８月14日から15日にかけて後町町内の路上で演じられる。伴奏楽器は三味線と太鼓、ビンザサラである。古くは素朴な輪踊りだけの盆踊りだったが、現在は舞台で横列になっても踊れるようにアレンジされている。昭和30年頃から次第に洗練され、現在の形式に定まったのは昭和40年（1965）代であるという。この嘉瀬奴踊に傘鉾が登場する。コギン刺の前掛けに袢纏を着た奴姿の踊り手が上手から登場し、下手からは早乙女姿の踊り手が場して縦列で前後しながら踊り、途中から傘鉾を中心とした古態の輪踊りとなる。

傘鉾は長柄の大傘で、傘の周囲に紫色の幕を垂らし、猿を象ったぬいぐるみ（這子型）数個を糸で吊り下げている。

地元の伝承では、元禄年間（1688～1703）に開拓された金木新田の開拓成就の祈願のために、願人坊が住吉大社の田植え踊りを勧進したものであるという。また、新田開発に藩から派遣されてきた実直な藩士鳴海伝右衛門を慰めるために、鳴海の忠僕徳助が即興的に歌ったり踊ったりしたのが、始まりであるとも伝えられている。

③願念坊踊

富山県小矢部市綾子に伝えられている願念坊踊という芸能は、毎年９月第１土曜日に太田神社の境内で演じられる。願念坊役は、金襴の頭巾を被り、墨染めの僧衣を着て縄帯（浅黄色の広帯に紅白の布を巻いた縄帯）を締め、五条袈裟をつけ、数珠を首に掛け、手甲脚絆をつけて草鞋を履く。踊り子の坊主は３人で、ねじり鉢巻に墨染めの僧衣を着て縄帯（浅黄色の広帯と浅葱と白の縄帯）を締め、手甲脚絆をつけて草鞋を履く。また、少年少女４人の踊り手は白鉢巻に黒い法被を着て相撲の化粧まわしのような前掛けを腰に巻き、赤い紐のついた白い手甲脚絆をつける。いわゆる奴姿である。

ダシと呼ばれる傘は二重傘の柄を願念坊役は左手で握り、右手の棒で傘の柄をたたく。ダシの最頂部に御幣を立て、上段の傘には浅黄色の幕、下段の傘には「願念坊踊」と白く染め抜いた赤い幕を傘の周囲に巡らせる。そして、傘の周縁部に造花を点々とつけ、傘下の柄には「願念坊主」「天下泰平」「豊年満作」と書いた行灯をつける。

お囃子の構成員は、歌い手、三味線、胡弓（現在は演者がいない）、尺八、太鼓（薄締太鼓）、ドラ（鉦）、四ツ竹の各１人ずつである。

最初に子供たちが「なげ」と「奴さん」を踊ると、願念坊役と坊主３人が登場して「六法」「お客さん」「吃又」を踊り、最後に子供たちも参加して「小大臣」を踊る。

地元に伝わる由緒では、石山本願寺の合戦で全国から集まった僧侶や門徒たちが、織田信長軍と戦った時、和睦が成立した時に歓喜して歌い踊り、越中（現富山県）から参加した僧侶たちが

地元各地に伝え、寺院の法会や棟上式などで踊られていたという。しかし、その芸態やダシ（傘鉾）の形態から、住吉踊りの系譜を引いていることは間違いないと考えられる。

（６）盆踊りの傘

盂蘭盆会と盆踊り

お盆は正月と共に日本人にとって最も重要な年中行事である。今でも、盆正月には帰省客で交通機関は満杯となり、日本における民族大移動とさえ言われている。

日本の盆行事は盂蘭盆会・盆供・精霊会とも呼ばれる仏教行事で、『盂蘭盆経』という経典に由来する。梵語のウランバーナの音訳で、「倒懸」と漢訳されている。逆さに吊されて苦しむ死者を救うために供養するという意味であるという。『盂蘭盆経』では、釈迦の弟子のひとり目連とその母親について次のように記している。目連が修行をして神通力を得て、その道眼で世間を見てみると、亡き母が餓鬼道に落ちて飲食もままならず、痩せ衰えているが見えた。目連は鉢に食物を盛って捧げたが、母がそれを口に入れようとすると、火炎となって食べることができない。目連は母が受ける倒懸の苦しみを見かね、嘆き悲しんで釈迦に救いを求めた。釈迦は「目連の母の罪業は深く、目連ひとりの力では救うことができないが、十万の衆僧の力を合わせたならば解脱することができる。七月十五日の衆僧自恣の日に七世父母と現在父母の厄難中の者のために、百味の飲食などの施物を十万の大徳衆僧に供養しなさい」と教えた。釈迦の教えに従って目連は母を救うことができた。そして、これを契機に釈迦は盂蘭盆会を定めたという。大分県各地に伝わる盆踊りの口説き「目連尊者」は、この説話を元にしたものである。

これが仏教経典による盆行事の由来であるが、この『盂蘭盆経』は五世紀末頃に中国で作られた偽経であるという[8]。インドで成立した釈迦仏教では死者の供養はほとんど意識されていなかった。しかし、大乗仏教に発展した仏教は、先祖崇拝の思想の強い中国に伝来して、新たなる発達を遂げた。「孝」を最高の道徳とする儒教世界と調和しながら仏教を普及させるためには、『盂蘭盆経』は大きな役割を果たしたのである。そして、古来から祖先崇拝の思想をもつ日本にも絶大な影響を与えたのである。

中国でも日本でも『盂蘭盆経』は釈迦の真説と信じられてきた。中国では六世紀前期に梁の武帝が同泰寺で盂蘭盆会を催したのが最初であると伝えられ、初唐頃にはかなりの流行が見られたという。日本には七世紀前半に伝来したようで、『日本書紀』の斉明天皇三（六五七）年七月十五日の項に「須彌山の像を飛鳥寺の西に作る。また、盂蘭盆会を設く」とあるのが、日本での盂蘭盆会の初見である。また、奈良時代になると、朝廷が大膳という役所に命じて盂蘭盆供養を供えさせている。宮廷外での盆供は平安時代の『蜻蛉日記』にも見え、盂蘭盆会は民衆にも次第に広がり、現在に至ったのである。

日本ではお盆は先祖供養の行事であると知られているが、正月もかつては亡くなった人たちの霊魂がこの世に戻ってくる日であった。しかし、その考え方は仏教行事であるお盆の中で最も強く結実し、亡き人を偲ぶとともに、先祖の霊魂を祀るようになったのである。

盆の時には、お墓に参るとともに、最近亡くなった人や祖先の霊を家に招いて供養する。

盆踊りは、盆の時に他界から現世に来訪してくる祖先の霊、そして亡くなったばかりの新仏（死者の霊魂）を歓待し、鎮送するための芸能である。盆踊りは、中世芸能である「念仏踊り」と「風流踊り」とが混じり合って成立した。念仏踊りとは、御霊（怨霊）の鎮魂や鎮送のために念仏や和讃を詠唱する「踊り念仏」から発展し、娯楽化芸能化したものである。また、風流踊りとは、豪華で人の目を驚かせる仮装などをして踊る群舞である。今でも大分県内の盆踊りで華やかな仮

装が行われたり、華麗な衣裳を揃えたりするのは、この風流踊りの名残である。

盆踊りが歴史上に初めて登場するのは室町時代の中頃である。15世紀末に記された『春日権神主師淳記』には、奈良の町において「盆ノオドリ」が昼は新薬師寺、夜は不空院の辻で行われたと記されている。これが盆踊りの史上での初見である。

盆踊りは江戸時代になると広く普及し、地方的特色をもちつつ、日本全国津々浦々にまで広まる。庶民に親しまれ自ら演じてこられた芸能は沢山あるが、盆踊りは日本で最も普遍的な芸能であるといえる。しかし、鎮魂慰霊、往生祈願などの念仏踊りが本来もっていた信仰的性格は次第に弱まり、地域社会のイベントとしての性格が強まってきている。これは盆踊りが慰霊の芸能として、当初から「霊魂を楽しませる」という要素があったためである。演目のバラエティーも幅広い。和讃などの信仰を基礎にしたもの、恋唄や心中物などの男女の機微を歌うもの、歌舞伎などのストーリー性ある演劇をもとにしたものなど、さまざまな物語が「口説き」として盆踊りで歌われてきた。盆踊りの特色はその口説きにある。ストーリー性があるため、日本人の精神性が最も良く現れるからである。

戦後のマスコミの発達によって、オリンピックや万博などのイベントをテーマとした盆踊り歌や、テレビや映画などのキャラクターを主人公とする盆踊り歌が登場し、テレビやラジオ、録音テープなどのメディアによって、これらの創作盆踊りが全国各地を席巻する勢いとなった。伝統的な盆踊りの伝承は危機に瀕したのである。しかし、特色ある地域文化の代表ともいえる「盆踊り」は伝統文化として次第に再評価されるようになってきた。

傘を立てて口説きを歌う

盆踊りの時に傘を立てる所が西日本各地に分布する。口説きを歌う音頭取りが片手で傘を持つ場合もあれば、後ろから差し掛ける所もある。また、音頭取りなどが登る櫓や縁台に傘の柄を縛って立てることもある。

P17 山香小学校での盆踊り

筆者の住む大分県では、録音に頼らず、音頭取りが口説きを実際に歌う所が各地に残っている。最初に出会ったのは、杵築市立山香小学校の運動会だった。運動会の演目に盆踊りがあり、校庭の中央に建てられた櫓の上で、音頭取りさんが差し掛けられた和傘の下で山香音頭を歌っていたのである。盆踊りの音頭取りが雨が降ってもいないのに、日中に傘を差す必要があるのだろうかと思う人もいるだろう。

宇佐市山間部を中心にして分布する「庭入り」では初盆の家の坪（内庭）の片隅に傘鉾を立て、シカシカという新仏の供養儀礼を行ってから盆踊りを踊る。その時に音頭取りの傍らで傘を持つ所がいくつもある。宇佐市院内町斎藤、下余、温見、同市安心院町荘などである。これは庭入りの傘鉾とは別のもので、単なる番傘であることが多い。しかし、傘鉾自身を立てた傍らや、傘鉾を櫓に結びつけて立てる所も多い。傘鉾も傘と同様なものと認識していると考えると、「庭入り」行事では番傘や傘鉾の下や傍らで口説きを歌っていることになる。

現在、盆踊りはお盆の期間の中だけで踊られることが多いため、傘を立てる盆踊りの分布を調べるのは、やや困難さがともなう。それでも管見に接した知見を少し記してみたい。

白石島の白石踊り

昭和51年に国重要無形民俗文化財に指定された「白石踊」は傘を立てる盆踊りの典型例で、

中心に「白石踊」と墨書きした大きな唐傘を片手で支える音頭取りが立ち、傍らで１人が大太鼓を打つ。

岡山県笠岡市白石島では、８月14日から16日にかけて、盆踊りの「白石踊」が行われる。白石踊りでは同じ音頭で一斉に13種の踊りを輪になって踊る。「男踊り」「奴踊り」「笠踊り」「鉄砲踊り」「真影踊り」「女踊り」「大師踊り」「阿亀踊り」「娘踊り（月見踊り）」「扇踊り」「二ツ拍子踊り」「梵天踊り」「ブラブラ踊り」など13種の踊り方である。男踊りでは着物に羽織姿に菅笠を被って豪放に踊り、女踊りでは紋服を丸帯で締めて頬被りに菅笠を被ってしとやかに踊る。笠踊りでは法被姿に向こう鉢巻きを締め、手に菅笠を持って大きな身振りで踊り、娘踊りでは振袖姿に手拭いを被って、手に扇子を持って優雅に踊る。

源平の水島合戦で討ち死にした武者たちの亡霊を供養するために、白石踊りは鎌倉時代初頭に始まったと伝える。白石島では前年の盆以後に亡くなった人の霊を荒霊（あらみたま）と呼ぶ。盆の時、荒霊（新仏）を祀る家の庭先に村人たちが訪れて供養のために盆踊りを踊ったのである。そのため「回向踊り」とも呼ばれていた。

傘を伴う盆踊り

・大分県日田市東有田地区平島の夏祭り盆踊り大会／提灯を吊る番傘を縁台に立てる。
・大分県日田市亀川町の口説き保存会／櫓の上で音頭取りが番傘の柄を片手に握る。
・大分県玖珠町八幡地区の供養盆踊り大会／櫓の上に朱傘を立てる。
・大分県宇佐市安心院町折敷田の庭入り／傘鉾とは別に音頭取りが番傘を片手で持つ。
・大分県宇佐市安心院町下毛の庭入り／傘鉾とは別に音頭取りに番傘を差し掛ける。
・大分県宇佐市院内町下余の庭入り／傘鉾とは別に音頭取りに番傘を差し掛ける。
・大分県宇佐市院内町斎藤の庭入り／傘鉾とは別に音頭取りが番傘を片手で持つ。
・大分県宇佐市院内町荘の庭入り／傘鉾とは別に音頭取りが番傘を片手で持つ。
・大分県宇佐市院内町五名の庭入り／傘鉾とは別に音頭取りが番傘を片手で持つ。
・大分県佐伯市蒲江町蒲江浦の盆踊り／やぐらの上の音頭口説きが片手で番傘を担ぐ。
・大分県佐伯市蒲江町付加深島／やぐらの上の口説きをする人が番傘を片手で担ぐ。
・大分県杵築市山香町の盆踊／やぐらの上の音頭取りに赤い和傘を差し掛ける。
・福岡県北九州市八幡東区の前田の盆踊／音頭取りと三味線の傍らに朱傘を立てる。
・福岡県北九州市八幡西区の木屋瀬踊／音頭取りと三味線の傍らに朱傘を立てる。
・福岡県北九州市八幡西区野面の盆踊／音頭取りの傍らに朱傘を立てる。
・福岡県京都郡みやこ町犀川の盆踊／口説き手に番傘を差し掛ける。
・福岡県直方市直方新町の日若踊／音頭取りの傍らに日若踊と墨書した朱傘を立てる。
・福岡県直方市植木の三申踊／音頭取りの傍らに大傘を立てる。
・福岡県鞍手町円覚寺の古門の盆踊り／提灯２挺を下げた朱傘を立てる。
・福岡県添田町の英彦山踊り／音頭手や笛・太鼓三味線の中心に番傘を立てていた。
・福岡県宗像市鐘崎の岬夏祭りの盆踊／櫓の柱に朱傘を固縛して立てる。
・宮崎市佐土原町のいろは口説き／音頭取りに唐傘をさしかけめる。
・愛媛県西予市明浜町渡江の盆踊／櫓の柱に朱傘を固縛して立てる。
・香川県小豆郡土庄町豊嶌の盆踊／音頭を歌う人が片手で番傘を担ぐ。
・島根県浜田市浜田の盆踊り口説き同好会／音頭取りが片手で番傘を持つ。
・島根県益田市大浜の盆踊／櫓の上に朱色の幕を巡らせた朱傘を立てる。
・島根県の隠岐島各地／やぐらの上の音頭取りさんに番傘を差し掛ける。

探してゆくと、まだまだ多くの事例が出てくると思われるが、西日本に主に分布しているようである。三重県や静岡県、それに大分県などに見られる盆の傘鉾は、新仏の依り代の役割を担っていると考えられるが、これらの盆踊りの音頭取りの傘は何のために立てられているのだろうか。傘鉾と同様、新仏の依り代と考えられるが、それだけではなく、読経する僧侶の上に設える人天蓋のように、もとは宗教的権威を示すための意味もあったのではないかと考えられる。音頭取りの歌う声を反射させ、遠くまで声を伝える効果があるとする説もあるが、実際にどのぐらいの効果があるのかは明らかではない。

注記

⑴黒田日出男「中世を旅する人々」『朝日百科日本の歴史別冊歴史を読みなおす10』朝日新聞社・1993.11.20。
⑵村上紀夫『まちかどの芸能史』解放出版社・2013。
⑶「住吉踊り」『住吉区誌』住吉区役所・1953。
⑷鹿谷勲「住吉大社の御田植え祭り」『祭礼行事・大阪府』（株）おうふう・1993。
⑸「浪華名物住吉踊復興由来」楽正会々長扇野菊松・大正11年（1922）4月（大阪市立図書館蔵）
⑹山路興造『翁の座』平凡社・1990。
⑺菊池貴一郎『江戸府内絵本風俗往来』青蛙房・2015。
⑻岡部和男「盂蘭盆経」『日本大百科事典（ジャポニカ）』小学館・1967。